

市政報告

問われる説明責任

12月議会の特徴は、新病院への交付金が9000万円増額されたことと、国民健康保険特別会計で市からの繰入金5000万円が減額されたことです。新病院については分娩の再開や診療科、ベッド数が関心の的だけに、早く「こういう病院を建設する」と計画を市民に説明する必要があります。ふたを開けたらこうだったというようなことではいけないと思います。国民健康保険も市単位から県単位に変わる方向も出ており、こちらもどうなるのか説明の必要があります。



12月20日 地域医療を守る会とともに府中市へ要望書を提出

発行者

小川 敏 男
水田 豊

府中市出口町 1076-4

TEL 41-7894

あけましておめでとーんじやござます

府中市はついに昨年4月町民の声を無視して北市民病院を地方独立行政法人化し縮小しました。移行する直前まで具体的な医師数、ベッド数など公表せず、縮小を隠しながら「病院を残すためには独法化しかない」といい続けた市の態度は、住民を愚弄し、地方自治を軽んじるもので、決して許されるものではありません。

現在の北市民病院は、常勤外科医師の不在、一般病床は35床に縮小され、ママシに噛まれても診てもらえないという中山間過疎地域の住民の需要に応えるには小さく、また唯一の公立病院という責任を果たそうにも常勤の医師が不足した病院となっています。

誤解のないようにいいますが、これは府中市が誤った医療政策を強引に、しかも住民の合意を得ることなく進めた結果であり、決して病院のせいではありません。新年を迎え改めて、決してあきらめず、北市民病院の機能回復を市に求めて行くことをみなさんと誓い合いたいと思います。

今年の総選挙で、民主党から自民党へと政権が変わりましたが、大切なことは主権者である私たちが地方自治の主人公として、地域に根差した行動、判断をおこなうことであると考えます。

新しい年の初めに、地域のみなさんとともにがんばって行く決意です。

今年もよろしく願いいたします。

水田 豊

伊藤吉和市長は住民と対話せよ

12月議会の一般質問で、「上下町で病院問題の説明会を開催せず、地域医療を守る会との面会要請にも一度も応じないのは何故か」という問いに対して、伊藤吉和市長は、「政争に利用される場には出ない」「住民の面会ではなくあなたがたの運動の標的になっているだけだ」と答弁しました。

病院の機能回復は

全住民の願い

上下町を中心とした旧

「政争の具」
政治的な争いに
勝つために利用す
る手段のこと

甲奴郡、神石郡の半径20キロ圏内には総合病院は北市民病院しかなく、診療所も上下町に2つ、上記圏域内あわせても6つしかない医療過疎地域です。そこに住む住民にとって、北市民病院の現状維持はまさに命の問題なのです。

事実をねじ曲げる

伊藤市長

地域医療を守る会は400人以上の会員が加入する、規約も代表者も存在する住民団体です。特定議員の後援会でも政治団体でもありません。

また説明会を求める声は、上下町の町内会長で組織する町内会北部連合

会の要望事項です。

住民団体を政治団体か議員後援会だと勝手に断じた上で病院問題を政争の具だと発言する市長の姿勢は、事実をねじ曲げ、問題を自分の都合の良い方向へと導く巧妙な情報操作だと言わざるを得ません。

今すぐ対話を!

病院の独法化は、現在、行政訴訟になっていきます。市長の対話拒否の姿勢が、住民をして「裁判しかない」と思わせています。市長は、異なった意見を排除せず、すぐに対話を始めるべきです。それが地域住民を預かる首長としての責任というものです。

上下で地域医療を守る会

第3回シンポジウム開催

230人の参加

12月10日上下町民会館で、地域医療を守る会主催の第3回シンポジウムが230人の参加者を得て開かれました。

当日は雪の舞い散る寒い日でしたが、熱心な討議のもと成功裏に終わりました。なお、守る会ではこの日採択された決議を基に府中市への要望書

を作成し、12月20日に提出をいたしました。

シンポジウムでは縮小された北市民病院の現状に関して次々と実態が報告され、「いままでと変わらない診療が行なわれる」との市の宣伝と実態がかけ離れている事実が報告されました。



4人の講演者が次々と講演



8人のシンポジストが6つの論点を議論

視 点

「開かれた議会」で反対意見排除の市長！

年末の衆議院選挙では社民党に支援をいただきありがとうございます。

開票に立ち合いましたが、投票率の低さに合わせ、白紙の多さにびっくりしました。政治不信の極みと、投票する候補がないという結果です。

さて、府中市議会は「開かれた議会」をめざして、議員定数や報酬を審議することになっています。

「開かれた議会」と言っても伊藤市長の10年を振り返ってみますとほど遠いものです。

1、議員調査権への制限

①議員の資料請求は担当課へ請求すればもらえたものが、市議会議長へ請求する方法に変更（請求資料が市長の判断で出されない）

②委員会の議事録を情報公開で請求に変更（東広島市など他市では議事録は議員の活動記録として手続き不要でもらえます）

③議案審議がなくなった（これにより自分が属さない委員会の議案に質問できなくなった）

2、予算・決算審議の委員会に今年度から市長・教育長は出席しない

とに変更（説明責任の放棄）

3、土地開発公社（桜が丘団地）の決算を審議しないことに変更。

議員ばかりかマスコミや市民にも冷たい仕打ちがされました。

4、ミニミニ紙を議場の記者席から追い出す。

5、町内会が選出した町内会長を認めない。

6、情報公開条例に「濫用」規定を設けて公開を制限する。（濫用規定があるのは県内で府中市だけです）

市民の皆さんは、「議員は市長提案をすべて追認するだけとなっている。これじゃ、市長のやりたい放題に加担しているようなものだ」と言われています。

議会の役割とは「市長の恣意、権力の濫用による市政運営となっていないかチェック（批判）することであり、議会は言論の府と言われるようにそのチェックは言論によって行なうものです。

批判する者を排除することは民主主義の否定、権力の濫用であり、議会は必要ないと言っていることと同じであり、市民が選んだ議員を軽視するものです。

「今更」はやめてほしい

坪単価を39%値下げして3年前に再スタートした桜が丘団地販売が好調です。一年目が18、2年目が12、3年目の今年は12月現在で18区画だそうです。最初の販売ははじめの2年間だけ2桁であとの7年間は1桁でした。12月議会では50区画販売達成を記念して一般会計補正予算の中に2区画を半額で販売する経費654万5千円などが提案されました。建設委員会で「当初、市は一切タッチしない。土地区画整理組合で販売すると言っていたことを、一言言っておく」と小森議員から発言があった。休憩時間に市長は「今更ということはやめてほしいなあ。そういう時期もあった。今は市の責任でやることになった」とブツブツ言っていた。

補正予算に反対。「販売促進キャンペーンの補正予算に反対するものではありません。しかし、土地区画整理組合が実質倒産し、府中市が約30億円を抱えることになったのが1回目の失敗とすれば、2010年3月に市が全面的に販売していく政策転換は2回目の失敗です。2回目の失敗の責任はあいまいにされたままです。ケジメをつけたい姿勢は『失敗しても自分の腹が痛むわけでもない』という気持ちがあるからと疑いたくなりません。結局、失敗のツケは市民が負担することになっています。2009年6月議会で、伊藤市長は『市の責任というのは議会と執行部の責任なわけです』とも言われました。まったくその通りです。政策転換にケジメがついていないことが反対の理由です。」とケジメを求めました。

12月25日の新聞に 支払い延滞の人に督促を行う女性が、心の病で次々と辞めていく同僚をみて一念発起する話です。「今度電話してきたら、ぶっ殺す！」といわれたり、夜の10時すぎまで怒鳴られ続ける時もあるが、つきつきりでアドバイスのメモをくれる先輩、最後まで待っている課長、職場のみんなが私の電話が終わるのを何も言わず待っていてくれた。

学校も他の会社もそうだと思います。個人任せになっっているのが心の病の原因の一つではないだろうか。

○心の病4年連続5000人超○

1996年の18人から年々10人ぐらいずつ増えて、2006年に92人となり2011年は最高の97人となっています。

今評判の本に「督促OL修行日記」(榎本まみ著)があります。新卒で信販会社に就職し、

調べていないのに なんでわかるの?

教育委員2名の方の任命について「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の第4条には『委員

の任命については、そのうち委員の定数の2分の1以上の者が同一の政党に所属することとなつてはならない』とありま

すが、調査されているのでしようか。また委員の構成で女性が2名から1名になるのは問題ないか」と質問すると、「調べていない。そうでない方ばかり」「(構成は)5人なので少なくとも女性について

た委員の構成で女性 は1人確保した。フランスはとれている」という答弁であった。「調べていない」は「調べていない」は社会を変える条件は女性の声を尊重することです。

12月20日、地域医療を守る会で伊藤市長に要望書を提出した。対応は総務課長であった。4人だけなんだから伊藤市長も会えばいいのと思う。



12月20日、地域医療を守る会で伊藤市長に要望書を提出した。対応は総務課長であった。4人だけなんだから伊藤市長も会えばいいのと思う。

ニヒルな人

平幹二郎さん

上下町時代のことを毎日新聞(2010年1月10日)で語っている。「生後9カ月で父と死別し、ずっと母一人子一人で育った。戦後は、カナダ移民二世の母が上京して駐留軍の通訳として働いたので、広島叔父の家に預けられた。映画館の闇の中に一人、身を沈めているのが好きだった。友だちと遊ぶよりも、裏山の神社を舞台に見立て、時代劇の真似をし

たり空想の中に遊ぶ方がよかった。教室では答えがわかってても手を挙げず、人前で話すのが大の苦手。そんなぼくがなぜ俳優になったかといえば、理数系にからきし弱くて俳優養成所の受験科目にはそれがなかったから……」

安原定子元上下町教育長によれば平さんを演劇部に誘ったら「いいよ」と入ってくれた。セリフ覚えが早く、あの通り「ニヒル」だったそうだ。その演劇部の公演が県で優勝したと聞いて、「……」は上下高校時代の演劇部の優勝のような気がする。